



Michael SLATER, *Charles Dickens*

(xvii + 696 頁, Yale University Press, 2009 年 11 月)

ISBN: 9780300112078

(評) 宮丸裕二

Yuji MIYAMARU

我が支部にとっての最高の友人の一人であるマイケル・スレイター教授は、おそらく存命中の人と物故者とは問わず今までで最もディケンズについて知っている人物であって、ある意味ではディケンズ本人よりもディケンズのことを知っているとも言えるだろう。そうした人物によって書かれた世にも贅沢な伝記である。ディケンズに近づき過ぎてしまうと忘れがちだが、そもそもどんな質のものであってもディケンズの伝記であればそれだけで伝記という分野全体の中で見ても大仕事なのである。それも、ピーター・アクロイドのものから数えても 20 年以上ぶりの伝記である。伝記大好きの国民性を持つ英国人を中心に売り上げも上々のようで、出版から 1 年未満で既に 5 万部を売り上げハードカバーでの増刷に入ったと聞かすが、これは学術書籍の中では実に異例の快挙と言って良い。

本書についてまず触れねばならないのは、その情報の分量と正確さである。このことが本書の大きな特徴をかたち作っているからである。執筆構想の段階で著者本人より聞いていた話からすると、最低で本書の執筆には 10 年はかかっていることになるが、そこに費やされた時間はそのまま作品の性質につながっている。誰よりもディケンズを知る著者が全てとは言えないが重要と思われることを全て年代順に等配分で配列することで、ある種の網羅性を備えるに至っており、読み物としてのみならずディケンズの生涯に起きた事象のレファレンスの意義を持つのである。こうした大部にして圧倒的な情報量で、人生を網羅的にカバーして個人の人生を浮かび上がらせるというスタイルは、正にヴィクトリア朝期までに英国において積み上げられた伝記の伝統的な形式の典型であり、リットン・ストレイチーが批判したのもまたこの形式である。フォスターに始まるディケンズの伝記も多くはこれに含まれる。もう長ったらしい伝記はいらないと言ったストレイチーからすると、ゆうに 2 世紀遅れたスタイルとも言えるかも知れないが、しかし、他にどうしたら良いのかというとな全面的な解決案をストレイチーが出したわけではないので、やはりこのスタイルであっても、とにかく書かれなければならない。そう考える時、ディケンズ研究

は年々盛んになりその数は増えて行く中で、その一人物の全体像としての伝記を書く人、あるいは書ける才量を持っている人は、むしろ消えて行っているという現状があって、ヴィクトリア朝的な伝記スタイルを踏襲していることよりも、書き手の消滅の方がずっと危機的なのである。

先述の正確さも、本書の非常に重要な点である。伝記にまつわっては、事実に反することがらであると指摘され、それが実証的に証明されていても、誤りが一向に正されないままに流通してしまうという例は、枚挙にいとまがない。アイザック・ニュートンが反射式望遠鏡を発明したとか、「パンがないのならケーキを食べれば良いのに」とマリー・アントワネットが言ったとか、福澤諭吉がアジア諸国を蔑視して侵略を肯定する思想を持っていたとかいった史実上の誤りは、こうしたことの例である。この手の事実に反する記述や認識の再生産は、伝記が過去の伝記を写しながら執筆されることから生じるのであって、そうした循環からディケンズだって無縁ではない。例えば、読者諸氏に改めてお訊きするならば、ディケンズの父親ジョン・ディケンズが投獄された際に、どうやって出獄したかをご存知だろうか。実にタイミング良く親戚から遺産が転がり込んだために負債を完済して、出獄を果たした、というのは、恥ずかしながら私が長らく事実と考えていた知識である。しかし、それも不思議はない、ディケンズの伝記という伝記をめくれば、この件に触れているものについてはどれもそう記述しているのである。正解は、自己破産申請をした、である。この事実については論文によって解き明かされて久しいのだが、しかし、それが広く万人の知識として定着しないのには、専ら伝記作者がそう記述しないことに起因している。本伝記では、こうした歴史的事実に関する訂正が数限りなく行われているが、こちらの思い違いに気づいて驚くことの連続だが、その全てに付けられた註で納得させてくれる。同じ伝記であっても、学術知識を持ち、自ら研究も行い、学術誌編集にも長年にわたって携わるという経験を持つ学者の立場から伝記が書かれるこの重要性が自ずと明らかになるだろう。今回正しく書き直されなければ、すでに誤りと分かっている誤りがこれからなお数十年にわたって点在したまま残留したことであろう。

そして、これらに今ひとつの本伝記の特徴を付け加えるならば、その分析的な記述法を採っているということがある。仮にアクロイドの伝記を物語型とするならば、本伝記は情報提供の後に必ず筆者による分析と見解が加わる分析型であると言える。これも実はフォースターに見られる、記録や事実を羅列した後でフォースター自身の分析や見解を加えて各章ごとに作品論とし、伝記全体で作家論として完成させるというスタイルを踏襲しているという見方ができる。文学研究において、媒体としての論文というかたちが定着し、論者によって設定されたテーマが研究の枠組みを決定するというのは、今日において常態

化したけれど、実は20世紀も半ば過ぎまでは、伝記は文学研究に際しての第一の参考書であるばかりでなく、伝記を執筆することこそが文学作品の研究に際しての代表的な方法論そのものであったのだ。つまり、伝記執筆を通じてその作家による作品の解釈、評価、分析、考察や意味づけといった研究過程の全てが行われていたのである。そして、個人個人の作家がそのまま持つ固有の意義を失った今日においては、ディケンズほどの大作家でも無条件に礼賛することは許されず、研究の方法も作家を軸において作家論を展開する伝記執筆という手法にとって代わって、特定のテーマを軸に展開する論文執筆という手法が大半になったが、しかし、分析考察方法としての伝記執筆が無効になったわけでは決してない。むしろ、マイケル・スレイターのような研究者には、伝記執筆こそが持てる知識や研究成果を結実させる上でもっとも性質上向いていると言えるのではないだろうか。

順番が前後するようではあるが、本書には伝記としての執筆指針が据えられている。本書が特に注目をしているディケンズの側面、すなわち、焦点を置いているのは「小説家としてのディケンズ」である。数あるディケンズの伝記の中でもその点に焦点を置いていることが本作を独自のものにしている。小説家について小説家としての側面に注目することは至って当たり前であって独特とは思われないかも知れないが、実はそうではない。小説家の他にもジャーナリスト、公開朗読家、慈善家など様々な顔を持つディケンズは、そうした総合的な職業者、あるいは有名人として語られる方が伝記では圧倒的に多く、またその生き方、人生哲学、思想面から注目されることはあっても、小説家であることに重心を置いて語られることの方が実は珍しいのである。それも、ディケンズの人生の実体験と作品を恣意的に並べるという手法ではなく、おそらく師事したティロットスの影響であろう、ここで採っているのはその時その時のディケンズの生活実態の記録と照らし合わせつつ、ディケンズがどういう段取りを経てそれぞれの小説を完成させたかという執筆作業過程を一日一日の単位で明らかにするという、緻密にして実証的な方法である。当然スレイター教授がこれまで『ディケンズ・インデックス』やエヴリマン版全集やジャーナリズム集成の編集といった仕事をこなしてきたことが、本作執筆の不可欠な基盤となっているのである。

以上のような方法を実践することで、スレイター版の伝記は特異なかたちを持つこととなる。一つは、書籍全体の中での紙面の用い方のバランスである。ディケンズについて伝記を書くとき通常は靴墨工場の件をはじめとして幼少期にかなりのページを使うことになる。ところがスレイター版は執筆活動に重点を置いているため全体の4分の1ほどでもう既に『ニコラス・ニクルビー』や『荒涼館』の執筆期に進んでいる。おそらくディケンズについて判明していること

を逐一検証しつつ紙面を埋めるなら、これが本来の健全な執筆バランスになるのだろう。また、ディケンズの伝記に限らず、作家についての伝記の多くが、作家の実体験と小説の描写を重ね併せて、「このシーンは誰よりも本人がこの作品に克明に記している」と言って小説からの引用で語らせることは一つの常套手段になっているが、スレイター教授はそれをあまりやっていない。そしてなにより、伝記作者の個人的な同情や共感が抑えられていることも顕著である。ディケンズの伝記では幼少期の体験を悲劇的に扱うことが一つの流儀になっており、チェスタトンでさえ例外ではないし、その伝統はアクロイドまで続いているが、スレイター教授はそういう語り方とは一線を画している。こうしたこともその執筆方針と関わって出てくる一つの特徴だと言って良いだろう。

そうした方法論が功を奏してのことだろう、この伝記は、これまでのディケンズの伝記とは決定的に異なる一つのことを指摘することに成功している。それはディケンズのアイデンティティの根幹に関わる重要なことである。つまり、ディケンズの幼少期の事情について同情的、悲劇的にのみ執筆されてきたというその事実そのものに目を向けており、靴墨工場体験に留まらない、ディケンズが生涯で行うパフォーマンスとしての過去の秘密の隠蔽や、逆に過去の秘密をほのめかしたりといった性癖を「隠れんぼ」と呼んで、ディケンズの意図的な自己イメージ生成作業と位置づける。生涯を通じてディケンズは自分の伝記を書いているわけなのであり、フォースターのものを始めとする各種伝記もディケンズ自身の影響下に置かれているというわけである。従って、幼少期のディケンズを捕まえては可哀想だ可哀想だと嘆いてはそうした影響からはやはり逃れられないのであって、それを客体化して事実描写に徹することができるのは、その背景に、スレイター教授の伝記という執筆形式に対する強い意識があるからに他ならない。本書に度々見られる他の伝記への言及は、そうした同ジャンルの執筆に対する意識を裏書きするものである。また、フォースターがその伝記の冒頭に『デイヴィッド・コパフィールド』を差し挟んだことをスレイター教授は大きく問題視しているが、ここにも、同ジャンルである伝記に本作品が強く意識を向けていることが端的に表れているだろう。これはディケンズの執筆過程とその素材たる経験を乱雑に重ね併せた例であり、多くの誤解を引き起こしたというのである。他の多くの伝記がなし得なかった伝記の自律性と執筆対象からの独立性というものを、本伝記では他の伝記を強く意識することで確保することに成功しているのである。本作は圧倒的な量の資料による勝利と言えるが、その資料というのは、ディケンズ存命中の記録文書だけではない。ディケンズ死後に著された他の伝記群も、劣らず本書執筆に際しての重要な資料の位置を占めているのである。